

第1回「高島市ふるさと自治大賞」など決まる！

市内には195の区や自治会のほか数多くの市民活動グループがあり、身近な環境美化や文化活動、地域住民の交流など、住みよい地域づくりをめざした様々な活動が行われています。

市では、このような市民の皆さんの自主的・積極的な活動が広く市内に広がることを目的に「高島市ふるさと自治大賞」・「高島市未来に誇れるまちづくり活動実践大賞」を募集し、応募のあった19団体の中から大賞等を選ぶ選考会を、12月23日（土）に新旭公民館で開催しました。

応募団体の活動発表や選考委員との意見交換ののち、公開選考会では、学識経験者らによる一般選考委員が「大賞」を、市内の中学3年生による中学生選考委員が子どもの視点で選んだ「子ども大賞」をそれぞれ選出しました。表彰式は2月17日（土）の「市民協働フォーラム」で行います。（自治共同参画課）



選考結果 【ふるさと自治大賞】（区・自治会部門）

賞	団体	内容
大賞	中庄区（マキノ）	200年以上前から地域に伝わる「高島音頭本調子」の担い手が減少するなか、地域の子どもや女性の力で、編曲や譜面化などの工夫を凝らして保存伝承に努めている
〃	藤江区（安曇川）	藤江村づくり委員会では、区民の手により間伐材を切り出して加工、河川改修の護岸に活用することで周辺景観にマッチした憩いの場づくりを3年にわたって実施
子ども大賞	畑区（高島）	過疎や高齢化が進み農業の担い手不足が進むなか、「日本の棚田百選」選定を契機に、都市住民を巻き込んだ「棚田オーナー制」で7年にわたり棚田の美田風景を守っている

【未来に誇れるまちづくり活動実践大賞】（市民グループ・個人部門）

賞	団体	内容
大賞	マキノ自然観察倶楽部（マキノ）	マキノの豊かな自然を将来に引継ぐ目的で8年前に設立。会員は80名。年間20回を超える赤坂山などでの自然観察会や里山保全活動で、参加者に新鮮な発見と感動を与えている
〃	武曽のむかしを学ぶ会（高島）	自らの住む武曽地域に残る伝統や慣わしなど、不確実で断片的な情報をもとに調査・研究を行い、記録に残して後世に伝える活動を続けている
子ども大賞	澤田 清（今津）	近江今津駅前から今津港への歩道や、幅約4m長さ約100mの川の土手にポピーやパンジーなど季節の花を10年以上にわたって育て続け、市民や観光客を和ませている

市民協働フォーラム

「まちづくり交流会」や「市民協働指針（提言書）」の作成などの中で議論された内容や成果をフォーラムで報告します。高島市の市民活動や協働の「いま」と「これから」について一緒に考えましょう。

- ▶日 時：2月17日（土）13時～16時30分
- ▶場 所：地場産しんあさひ
- ▶内 容

- 《第1部》「高島市ふるさと自治大賞・未来に誇れるまちづくり活動実践大賞」表彰
- 《第2部》「まちづくり交流会」・「市民協働に向けた提言書」の報告
- 《第3部》パネルディスカッション

人と自然の「おもてなし」があるまちづくり

～「高島あるもの情報」をお寄せください～



高島市では、昨年県版特区に認定された「びわ湖・里山観光振興特区」を柱に、エコツーリズムの推進を図るため、「人と自然のおもてなし」をテーマに、あるもの探しにより、高島の良さを整理し、もう一度地域に学び取り組みをしています。

皆さんの身近なところに、歴史や生活文化、生業や食など、地域に特化した資源が埋もれていませんか。このような隠れた資源を掘り起こし、観光として商品づくりに結びつけ、より魅力的な高島の観光地づくりにつなげていきたいと考えています。

「語り部の名人」「隠れた名産」「地域や場所にまつわる言い伝え」「地域の名人さん」などなど、『高島あるもの情報』をお寄せください。お待ちしております。

- 問 高島地域観光振興協議会
☎（38）3970
- 問 市役所営業開発室
☎（25）8515
FAX（25）8145

市長日記

「鬼は外、福は内」。なんと興味深い慣習が残っていることでしょうか。人間も自然の一部であった頃と今とはまたその意味も違うはず。一番不確かな自分を励まし、365日のうち1日でも多く福の日にしたものです。

合併3年目が幕を開け、初の市勢要覧が完成しました。高島の「あるある」が溢れており、水彩画で高島の景色も暖かく描かれています。ここには全て在るもの、本物が掲載されており、温暖化で沈み行く悲しみとは対極にある有難さです。ピーターラビットの故郷イギリスの湖水地方は、100年前に絵本に描かれた景色が今も現役で残っており、それが多くの人を引き付けています。高島市も要覧に描かれた景色の多くを回復しながら100年守りたいものです。

あるテレビ番組で納豆を取り上げたら、その翌日から全国で納豆ブーム。高島市内のスーパーの棚からも納豆が消えたそうです。相田みつをさんの「分け合えば余る、奪い合えば足りぬ」の言葉どおり、足りぬ故にエスカレートしています。愛情からせひ家族に食べさせようと買い求める人が多いのは微笑ましい気もします。しかし、1テレビ番組によって日本中が上滑りする様は危うさを孕んでいます。第4の権力と言われるマスコミに踊らされない賢い個人を目指さねばなりません。また、巧妙に子どもを虜にして、キャラクターグッズを売るような確信犯的番組から子どもたちを守ることも考える必要がありそうです。納豆と一緒に叱られますが、テレビの政治討論通でなく、本物の地域自治へ

海東英和 拝



「おつきん棕川」～引っ張り出された地域の底力～

紅葉がまぶしい11月の下旬、今津町棕川集落内の散策を楽しむグループが見られました。集落をまるごと開放し、山里の暮らしがりを肌で感じて、「おじい」「おばあ」と交流するイベント「おつきん棕川」が開催された日の様子です。このイベントは3年前から開催され、今年が4回目。大阪、京都や大津などへ出て暮らす人たちの里帰りを促し、おじいちゃんやおばあちゃんのふるさとをアピールするために開催されているものです。

当日は、「かやぶき民家の屋根裏探検」「炭焼き小屋探訪」「麻糸づくり体験」など、昔から地域に根付いてきた、しかし今では日頃ほとんど体験できない文化や技術にふれることができることから、100人を超える人たちが訪れました。

●地域の底力

棕川は福井県境にある集落で、分水嶺が集落内を通るなど特徴のある集落です。多いときには60数戸、300〜400人が暮らしていたこの集落も、現在では戸数が減少し、高齢化の進展が深刻な集落です。しかし、ここに住んでいる皆さんは元気です。地域で自主的に開催する「生き生きサロン」を一昨年は12回開催するなど、元気の源を自分たちの呼びかけで作り上げています。

また、生き生きサロンなどの集まりの中から、「おつきん棕川」を支える技術や知恵の掘り起しが始まりました。棕川に移り住んできた住人が仕掛け人となり、お年寄りの方々の眠っていた力が引き出され、昨年から「麻糸づくり」を復活する取り組みが始まっています。「おこぎ（麻の茎をしいて繊維を取り出す）」の作業では、「しっかりせよ」と80歳代の方から指示の声飛び、「もう忘れてしまった」の言葉とは裏腹に、慣れた手つきが麻糸をつむいでいきます。生活の中で永年蓄積された技術がよみがえった瞬間です。

このほかに、イベントには米やおはぎ、もちや蒭の佃煮、漬物などが出品され、積み重ねられた暮らしの豊かさの一端を感じ取ることができました。

●うるさい半面、賑やか半面

イベントの仕掛け人に、昨年から滋賀県立大学黒田教授の研究室が応援に加わり、また、大学のエコツーリズムを研究する動きも出てきています。こうした大きな流れの中、地域の人たちは、走りすぎぬよう目を配りながらも「来る人は拒まず、一緒にいる間は持ちつ持たれつで」と、わが子を見守るような目で語り、共存共栄の関係を築こうとしています。